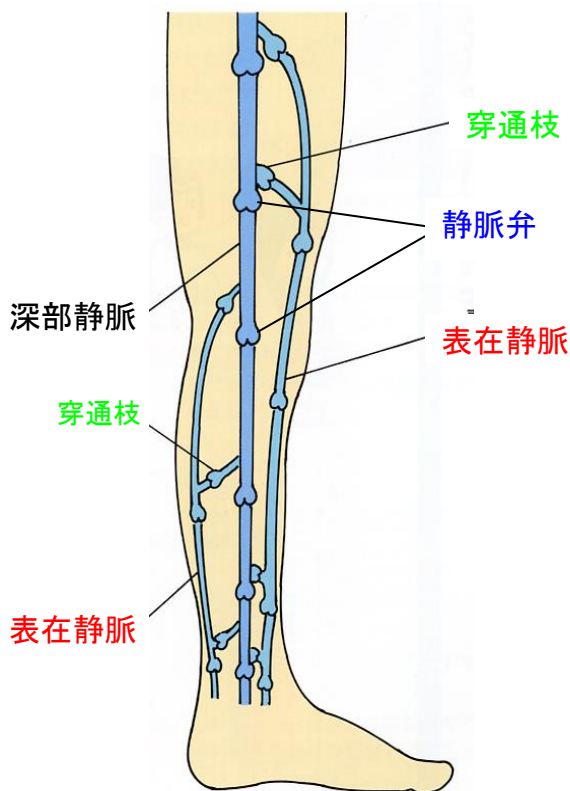


# 下肢静脈瘤ってどんな病気？



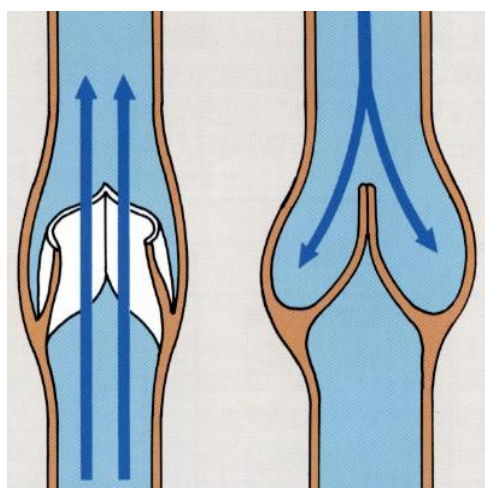
## 足の静脈の構造

足の静脈の本幹は、筋肉の深い所で骨の横を動脈や神経に寄り添って流れています（深部静脈）。

本幹と別に皮膚のすぐ下にも静脈があり、足の付け根と膝の後で本幹に合流している表面の静脈（表在静脈）があります。

また、深いところを流れている本幹（深部静脈）と表面の静脈（表在静脈）の間をつなぐ枝（穿通枝）があります。

静脈には血液を足先から心臓に戻すために、いたるところに弁（静脈弁）があります。左下に静脈弁の拡大図がありますが、この弁の作用により、上向きの血流が可能となります。2本足で立っている人間では血液はその重みで下に戻ろうとしますが、これを食い止めているのが静脈弁です。



静脈弁の拡大図

## 静脈瘤とは？

ところがいろいろな理由で表面の静脈（表在静脈）の弁（静脈弁）が壊れて血液が逆流し、静脈の圧力が上がって膨らんでしまうのが静脈瘤という病気です。

静脈瘤が高度になると血液が足によどんで、疲れやすい、色がつく、潰瘍ができるなどの症状が出てきます。

時には静脈内に血液の塊（血栓）ができ、それが肺にとび呼吸困難となる場合もあります。重症例では突然死の原因にもなります（エコノミークラス症候群）。



## 治 療

### 1) 硬化療法

静脈瘤の中に血液を固める薬を注射して圧迫し、固めてしまう方法です。外来通院で可能ですが、再発が多いのが欠点です。

### 2) 根治的抜去術（ストリッピング術）

100年以上前から行われている手術です。逆流している静脈を数箇所で作開して抜去します。麻酔は背中に麻酔用の細くて柔らかい管を入れ下半身を麻酔します。手術中に寝ていたい方は麻酔科に相談して下さい。

通常2泊3日の入院で治療可能です。前日に入院していただき、翌日手術し、次の日には退院です。

また抜去した静脈瘤に沿って青あざができる場合があります。これは静脈瘤の枝からの出血で、枝をすべて処理しようとするとう傷が多くなり余計に目立つので、外から圧迫して止血しますが時に目立つ場合があるのです。しかしこれは時間がたてば必ず消えてゆきます。術後しばらくの間切開した傷や静脈瘤を抜去した部位に痛みや痺れを感じるがありますが、これも時間と共に軽快していきます。

手術ですからどうしても傷がつきますが、皮膚の筋に沿って目立たないように小さくし、数はなるべく少なくします。また病気の特殊性から手術でも瘤を完全に切除できない事もあり、硬化療法や局所麻酔下の部分切除が必要になる場合もあります。

退院後、日常生活には問題ありませんし軽作業は可能です。一週間ほど後に外来で術後の診察をさせていただきます。

右にストリッピング術前と一週間後の写真を示します。御参照下さい。

一週間後では、まだ少しきずがわかりますが、これも日を追うごとに目立たなくなってゆきます。



尚、表の2つの図は、アルケア KK のご好意により、愛知県立看護大学平井正文教授監修の冊子から改編して本紙に掲載させていただきました。